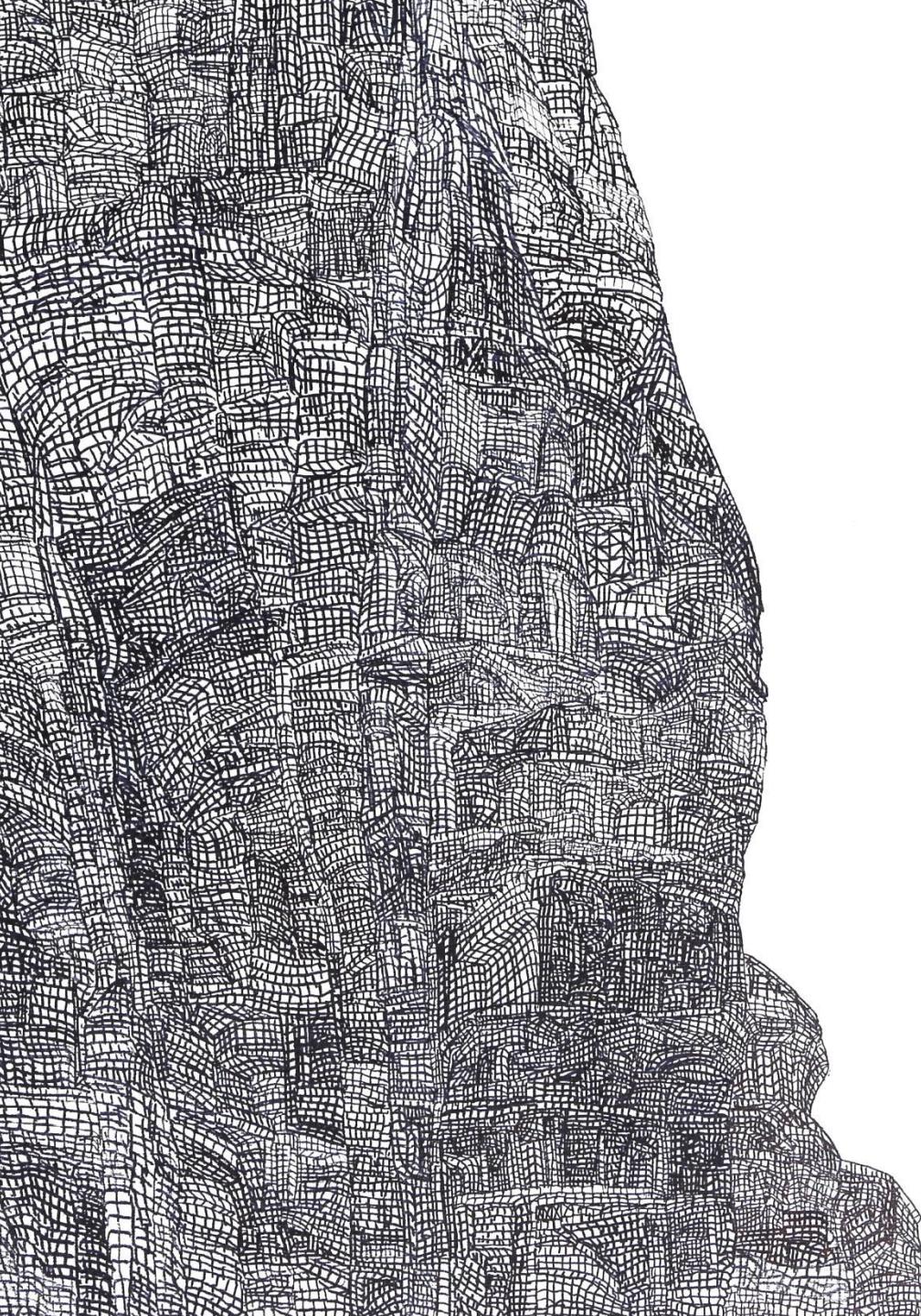




短編小説

ある日 僕は 山登りをはじめた

絵 やまなみ工房の人たち
文 山下 完和



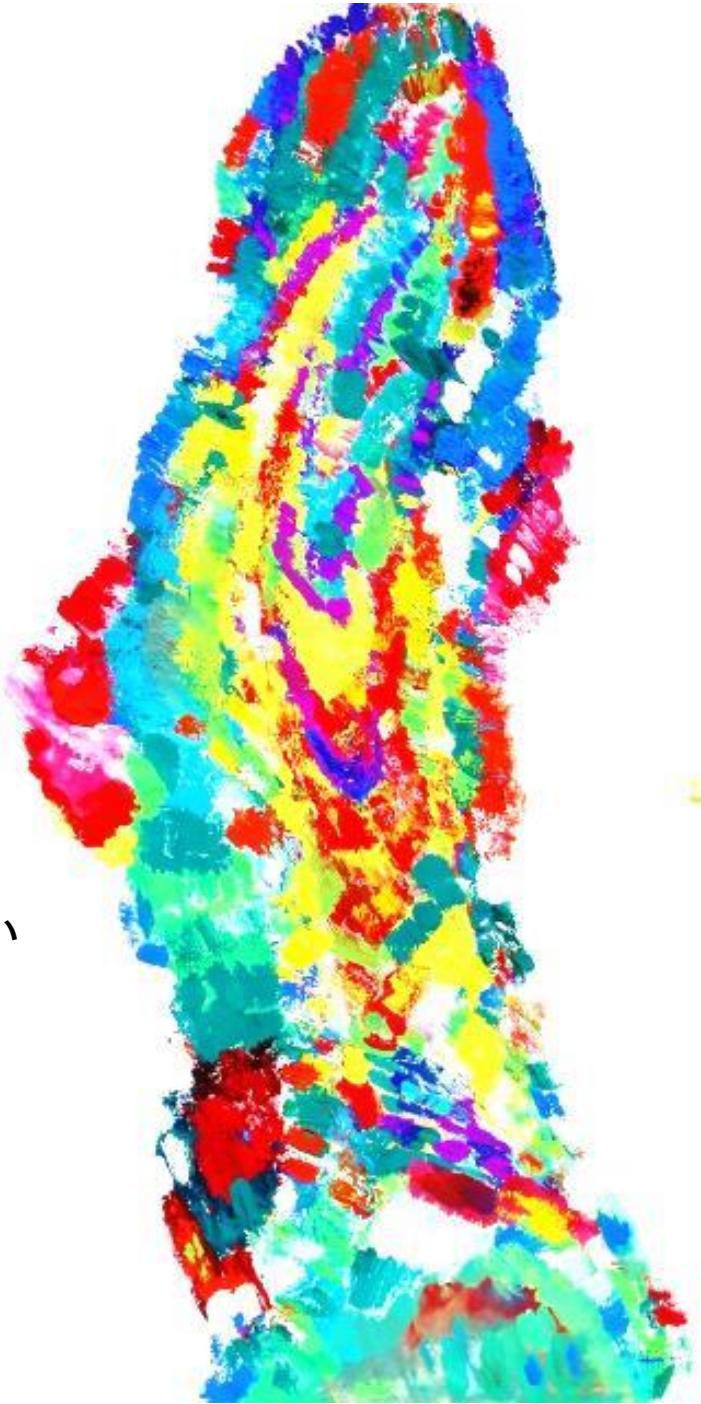
ある日僕は山登りを始めた

どうしてその山を登り始めたのかわからない

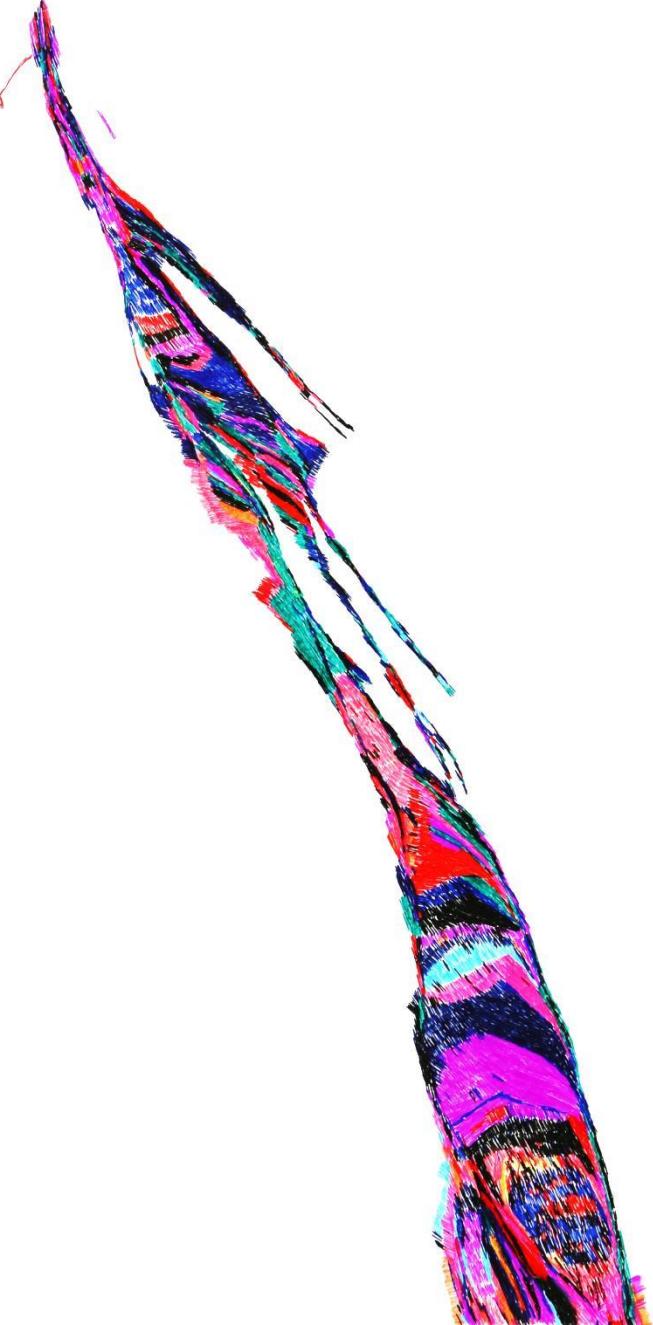
理由なんてない 先のことなどわからない

高いか低いかわからないその山にむかい

ただ一步踏み出しただけ



僕は山登りがきらいだ
かといって他に好きな事もなければ したいこともない
自信もない 自慢できることもない
もちろん
山に登ったことなどない



だけど僕は山登りを始めた

歩いているとひとりの男の子に会った
男の子はにっこり笑って僕の横に並んだ
男の子は僕に比べると歩くのがとても遅い
せっかちな僕はその子と歩くのはいやだったけど
一緒に歩く事にした
理由なんてない どこの誰だかわからない
男の子は目が合うと何も言わず
ただにっこり笑うだけ





歩いているとひとりの女の子に会った
女の子はにっこり笑って僕の横に並んだ
女の子は僕の声が聞こえない
女の子の声は僕に聞こえない
短気な僕はその子と話すのがいやだったけど
一緒に歩く事にした
理由なんてない その子の気持ちもわからない
女の子は目が合うと何も言わず
ただ手を握るだけ



歩いているとまたひとりの女の子に会った

女の子は僕に見向きもせず 手にした人形を見つめていた

女の子は両手で人形を握り カサカサと指を動かす

人形に興味のない僕は その子のしていることが無駄に思えたけど

一緒に歩く事にした

理由なんてない ただ手を引くとついてきただけ

女の子は前を見ない ただ手にした人形を見つめるだけ



歩いているとまたひとりの男の子に会った

男の子は耳をふさぎ飛び跳ねている

男の子は独り言を言いながら飛び跳ねている

騒がしいのが嫌いな僕はその子のことがいやだったけど待つことにした

理由なんてない いつまで飛ぶのか気になっただけ

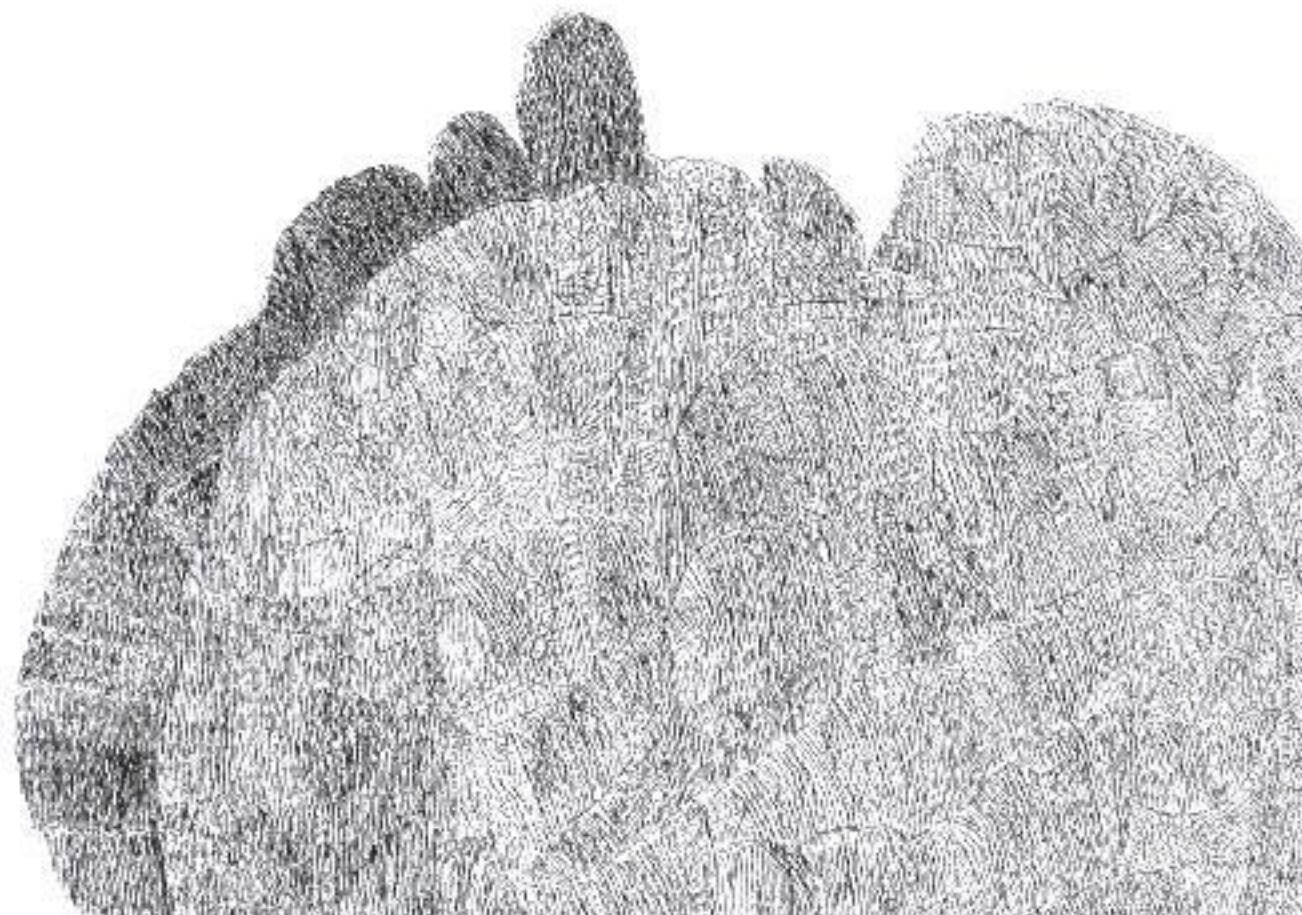
男の子は僕を気にしない ただ不快な音をたて飛び跳ねるだけ

日が暮れようとしていた
日が暮れると道が見えない

灯りのある場所をさがさなければ

先を急ぎたい
先を急ぎたいけど飛び跳ねる男の子を放ってはいけない気がした

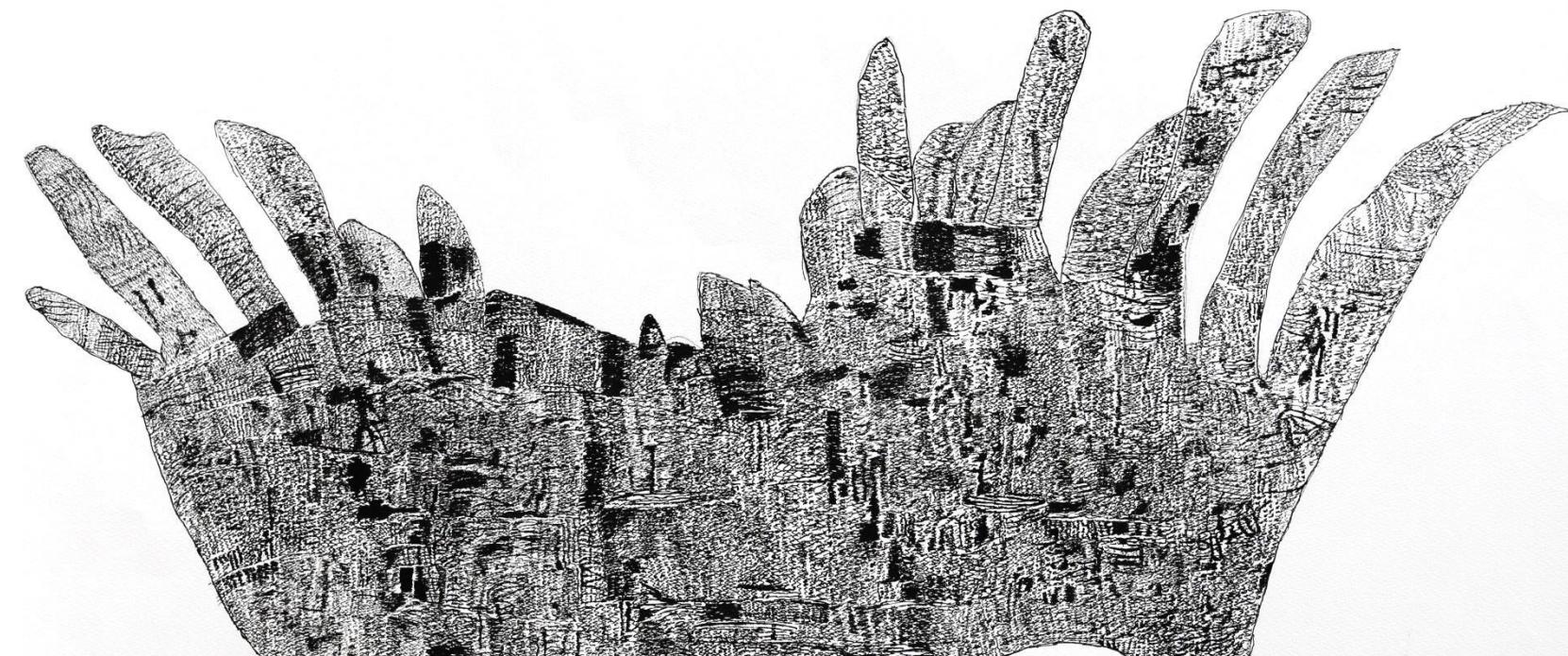
僕は男の子の手を引っ張った



男の子は驚いた
男の子は大声で泣き出し 怒った
そして僕じゃなく自分を叩きはじめた

男の子はまだここにいたかったのだね
先を急ぎたいのは僕だけだったのだね

君の気持ちに気づけなくてごめんね



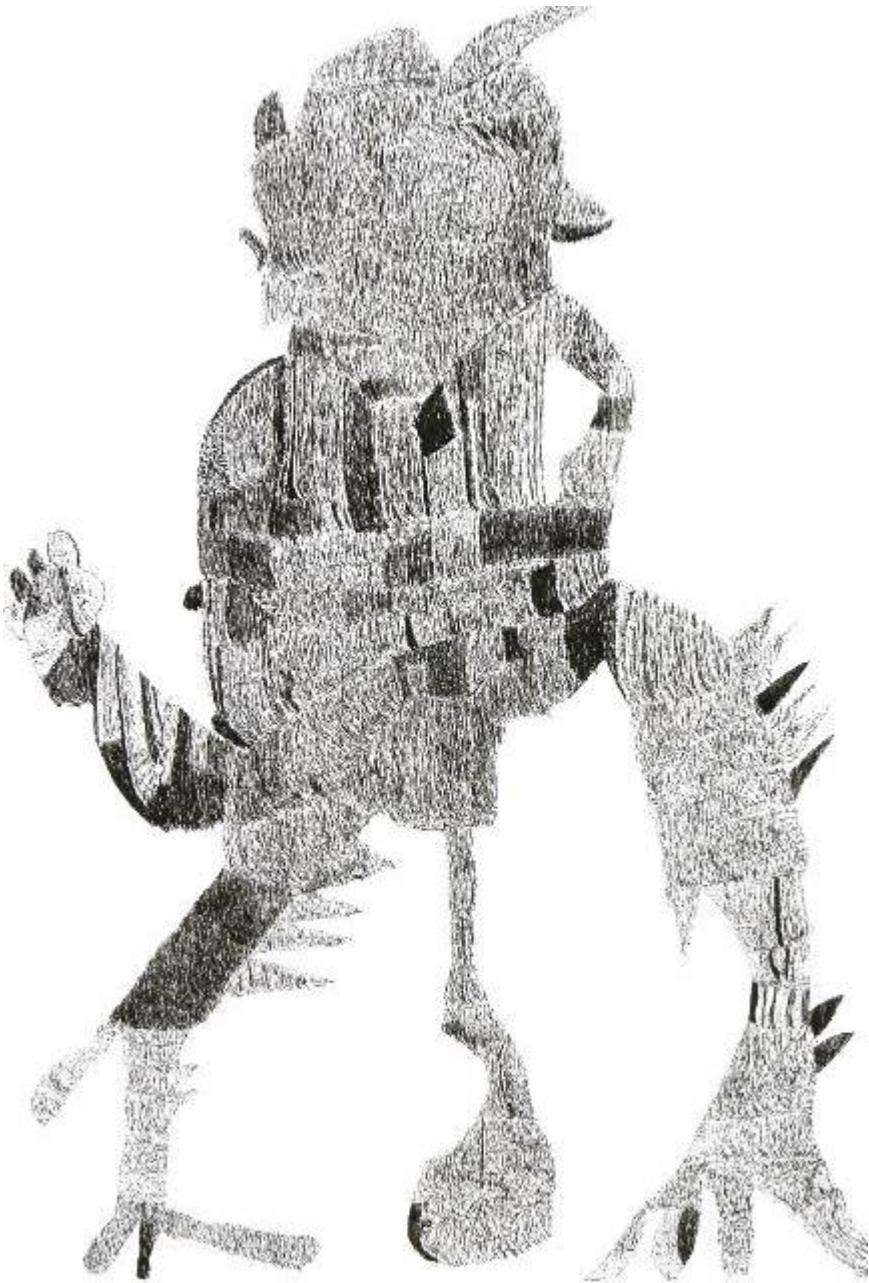
歩くのが遅い男の子

何も聞こえない女の子

人形を手にした女の子

飛び跳ねる男の子

僕



日が沈み僕達5人は暗闇につつまれた

臆病な僕は暗闇がきらいだ

先に進めない

暗闇につつまれた僕達は夜空を眺めるしかなかった

ひとつしかない夜空を眺めるしかなかった





夜空にはキラキラと星が輝く たくさんの星が輝く
夜空を真剣に眺めたのは初めてだ

星は形も色もみんな違うのか
一つしかない夜空がきれいなのは 一つとして同じ星がないからなのか

男の子の笑顔 女の子の手の温もり
カサカサと人形を触る音 地面を蹴る音が臆病な僕をつつんでくれた

夜が明けようとしていた
夜が明けると道が見える

引き返すことも考えたけど とどまる事も考えたけど
一人なら そうしただろうけど

僕は山登りを続けた

暗闇が楽しいと知ったから

孤独な暗闇が寂しいだけだと知ったから



朝が来た
朝が来たけど僕達はお互いの事を何も知らない

朝が来た
朝が来てお腹が空いたけど僕は料理を作れない

きっと4人も作れない
料理を作れないだけじゃなくて きっと何もできない

男の子の笑顔 女の子の手の温もり
カサカサと人形を触る音 地面を蹴る音が響くだけ



料理を作れないから食べる事を我慢した

食べる事を我慢した時

僕より歩くのが遅い男の子が 小さなパンを差し出した

僕より歩くのが遅い男の子は 小さなパンを5つに分けた

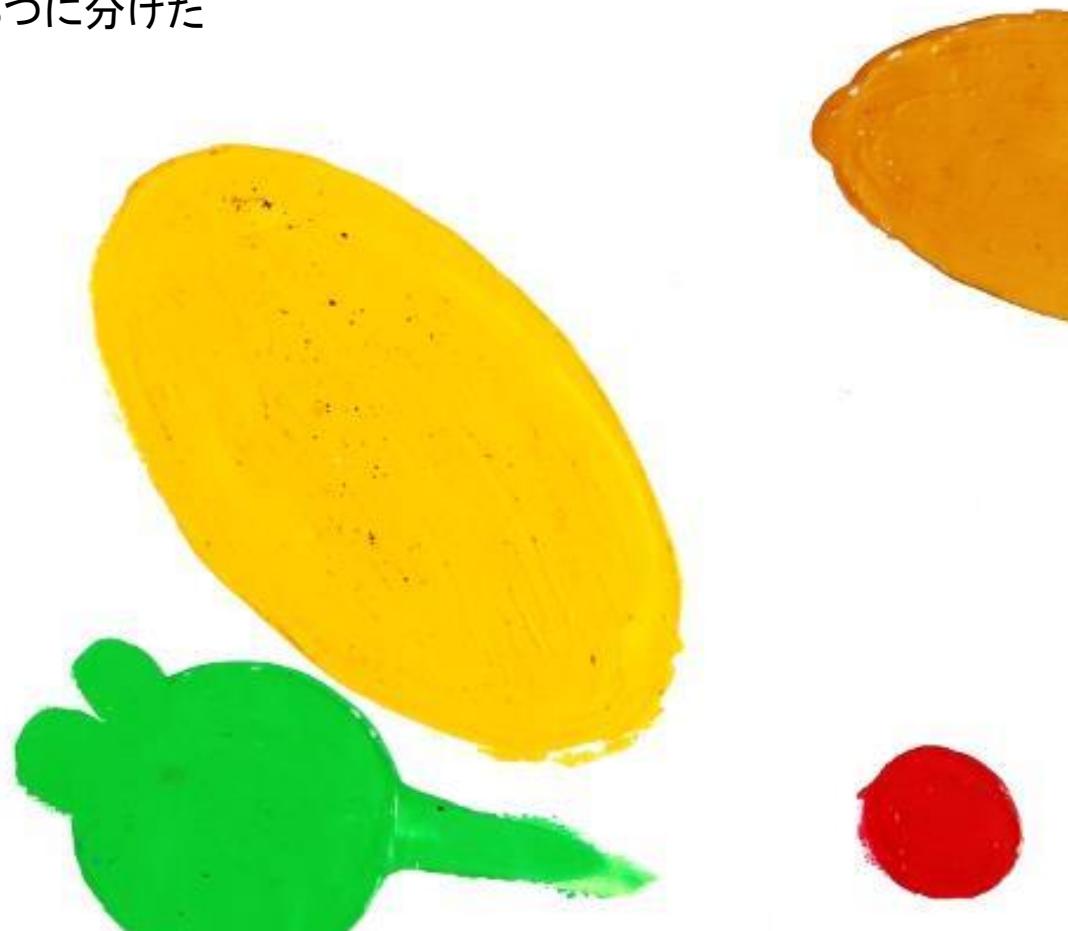
一人分の小さなパン

僕ならこっそり一人で食べるのに

僕より歩くのが遅い男の子は 小さなパンを5つに分けた

そしてにっこり笑うだけ

ひとかけらのパンは僕の心を満たしてくれた



僕は山登りを続けた





上り坂
平坦な道がない 先も見えない

どこまでもつづく上り坂

目の前に現れたのは更に険しい
上り坂

駄目だ 登れる気がしない
辛く大変な思いはしたくない

男の子の笑顔 女の子の手の温もり
カサカサと人形を触る音 地面を蹴る音が響くだけ

険しい上り坂を前に僕は 涙した

涙した時

僕の声が聞こえない女の子が 僕の手を何も言わず握りしめた

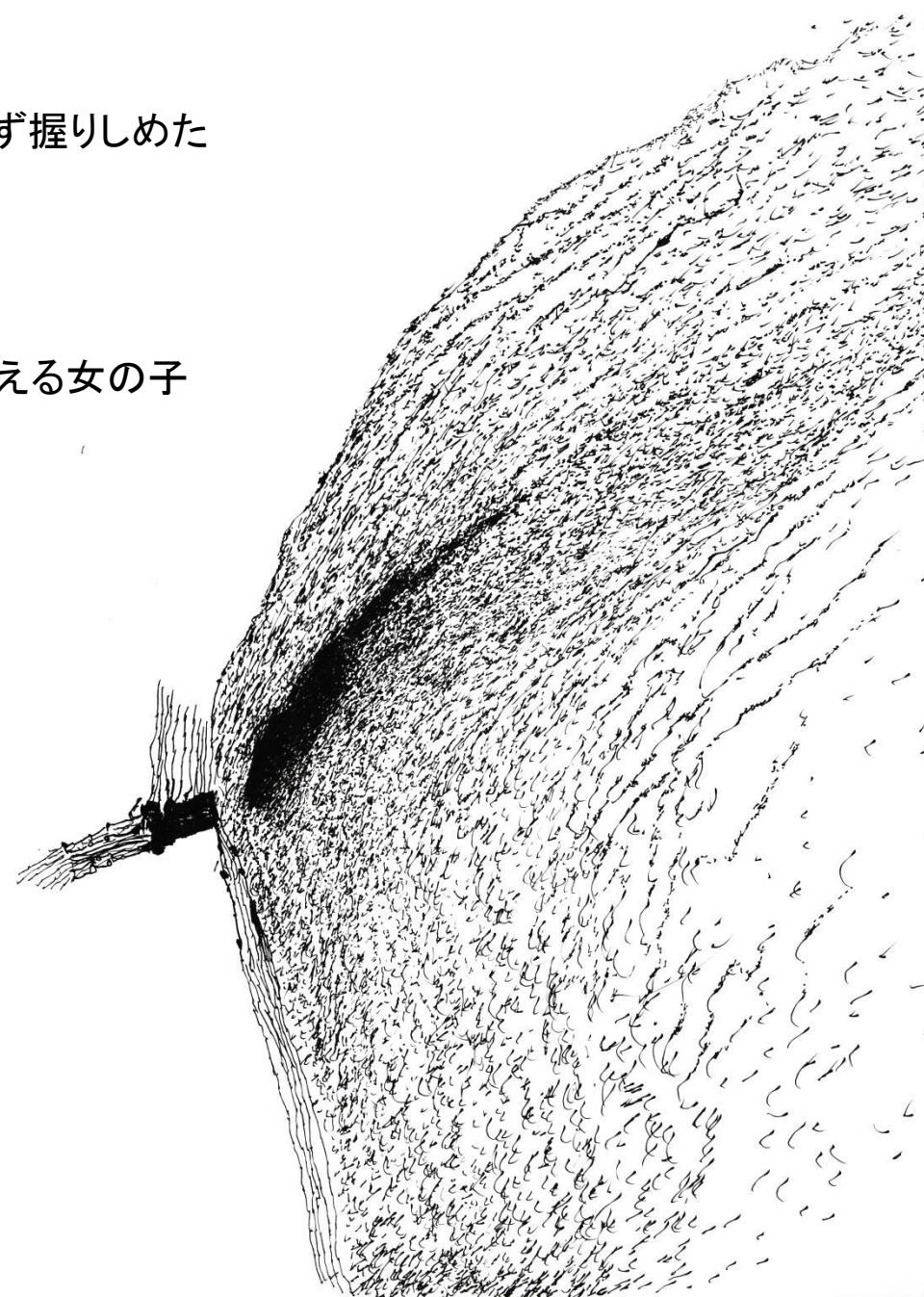
辛い時

僕は人の事などどうでもいい

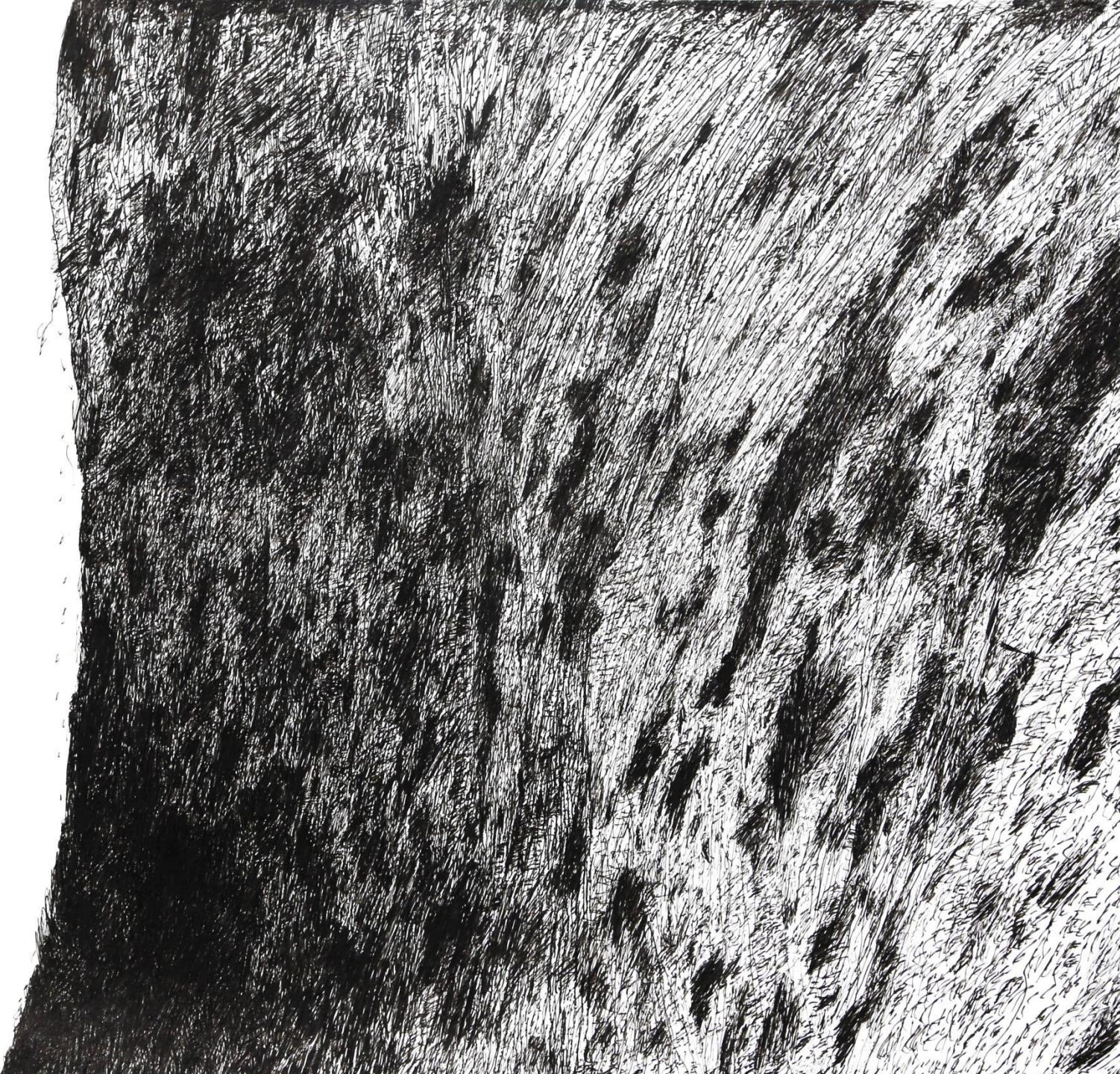
僕の声が聞こえない女の子は 僕の心の声が聞こえる女の子

そして手を握るだけ

温かな手は僕に勇気を与えてくれた



僕は山登りを続けた





歩いていこう
一步ずつ ゆっくりゆっくり歩いていこう

歩いていたら 目の前に花畠がひろがった 色とりどりの花畠がひろがった
赤 白 黄色
あたり一面花畠 夢のような花畠

男の子の笑顔 女の子の手の温もり
カサカサと人形を触る音 地面を蹴る音が響くだけ



きれいだね 立ち尽くす僕

おかしいね
花畠に見向きもせず指先を見つめていたのは人形を手にした女の子

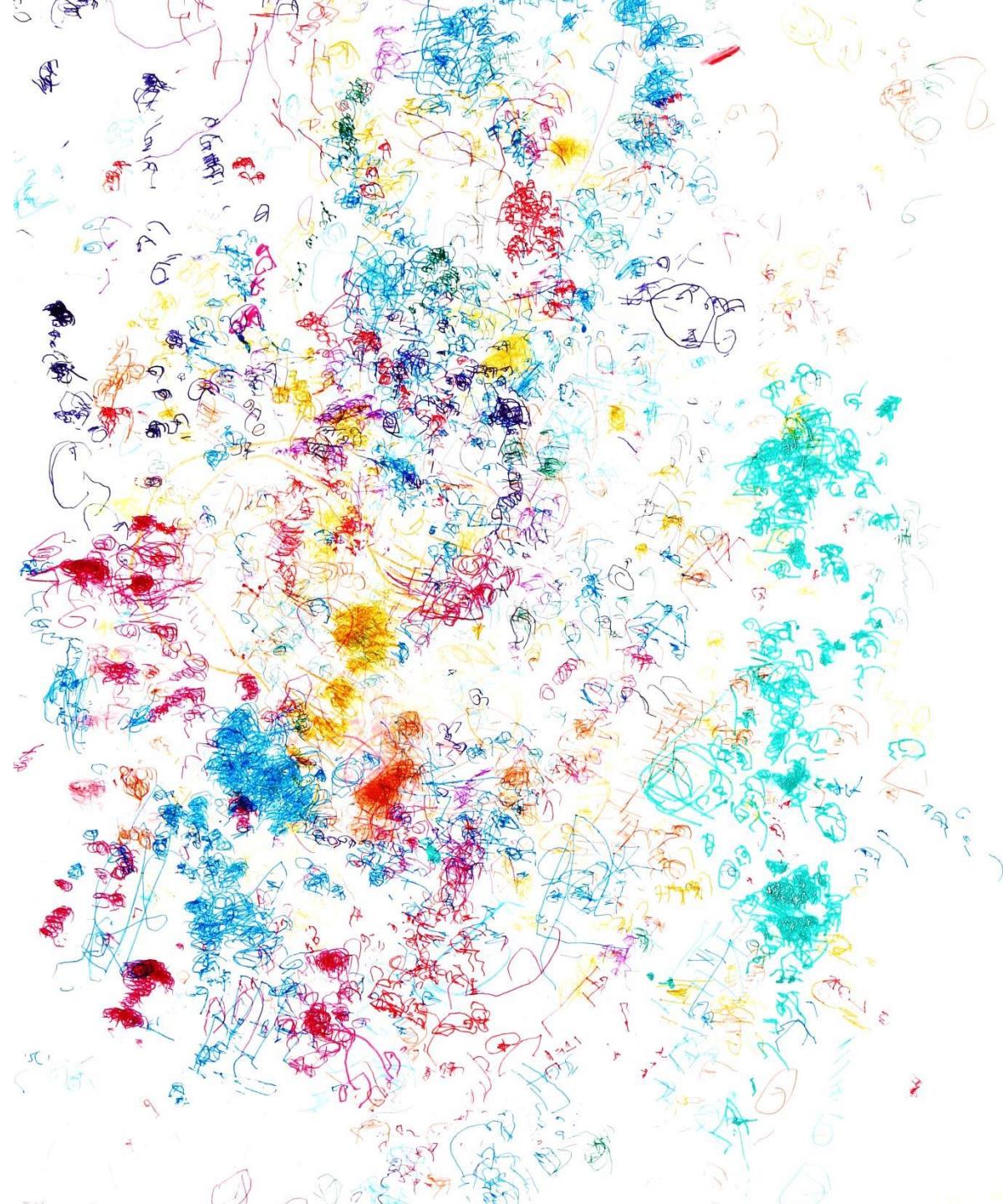
誰もが感動すると思った花畠

人形を手にした女の子は 花より美しいと思えるものがあるのだね
大事なものがあるのだね

指先を見つめカサカサと人形を触る音

その音は僕にいろんな感じ方があつていいことを教えてくれた

僕は山登りを続けた





雨が降る
道は泥濘(ぬかるみ) これ以上進めないほど雨が降る

風も吹く
目を開ける事が出来ないほど風が吹く

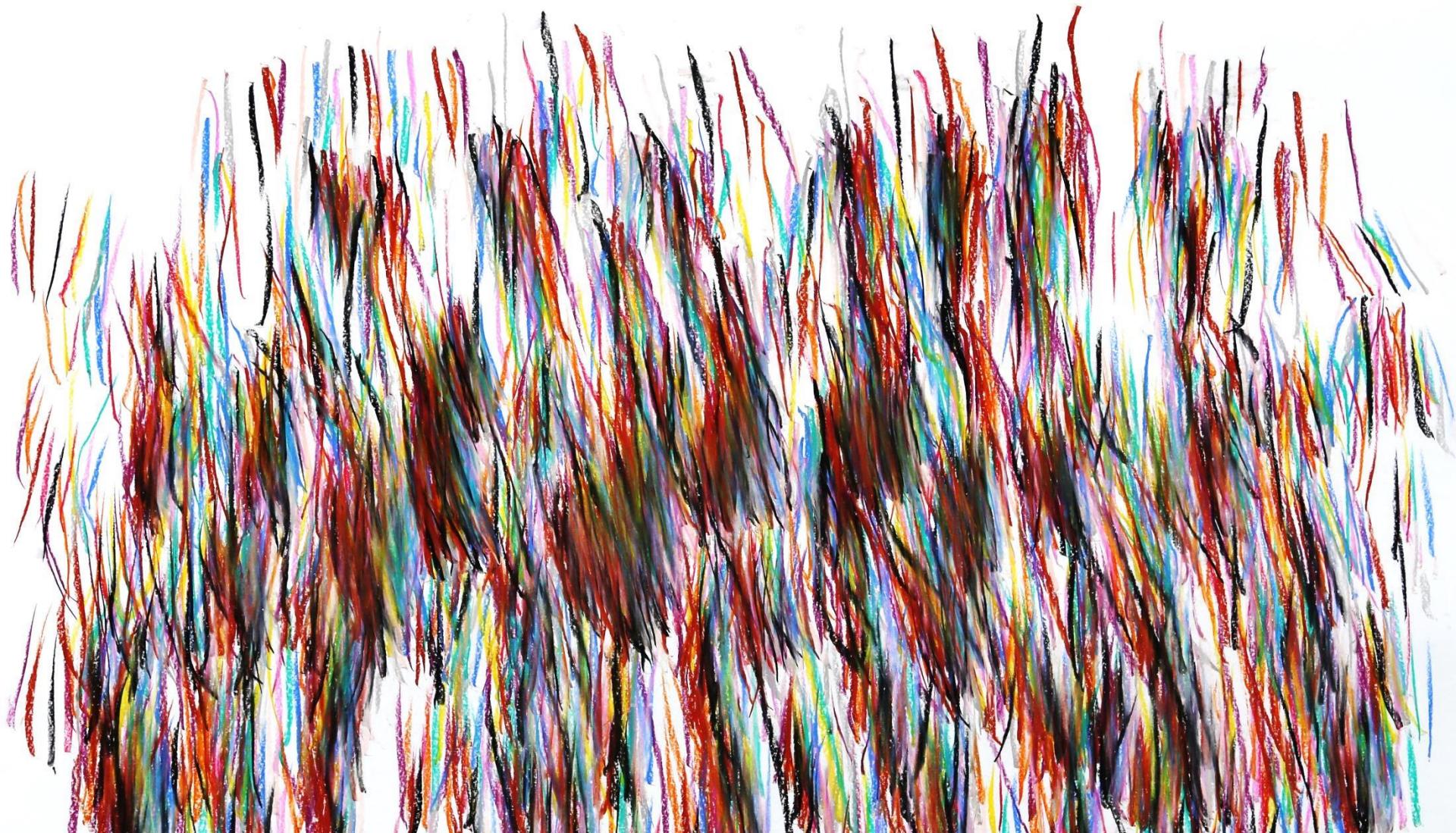
僕は雨風がしのげる場所を探した
探しているうち 迷子になった

男の子の笑顔が見えない 女の子の手の温もりを感じない
カサカサと人形を触る音も聞こえない 地面を蹴る音も響かない

孤独に苛(さいな)まれた僕は1人では何もできない事に気が付いた

4人に会いたい

僕には4人が必要なのだ



雨の中 僕は4人を必死で探した

どれだけ道がぬかるんでも 目を開ける事ができなくても
僕は夢中で4人を探した

探しても 探しても見つからない絶望の果て
聞き覚えのある物音がかすかに聞こえた

間違いない 地面を蹴る音だ



音が大きくなるにつれ 遠くに飛び跳ねる男の子の姿が見えた

男の子は耳をふさぎ飛び跳ねている

男の子は独り言を言いながら飛び跳ねている

男の子は騒がしいのが嫌いな僕を

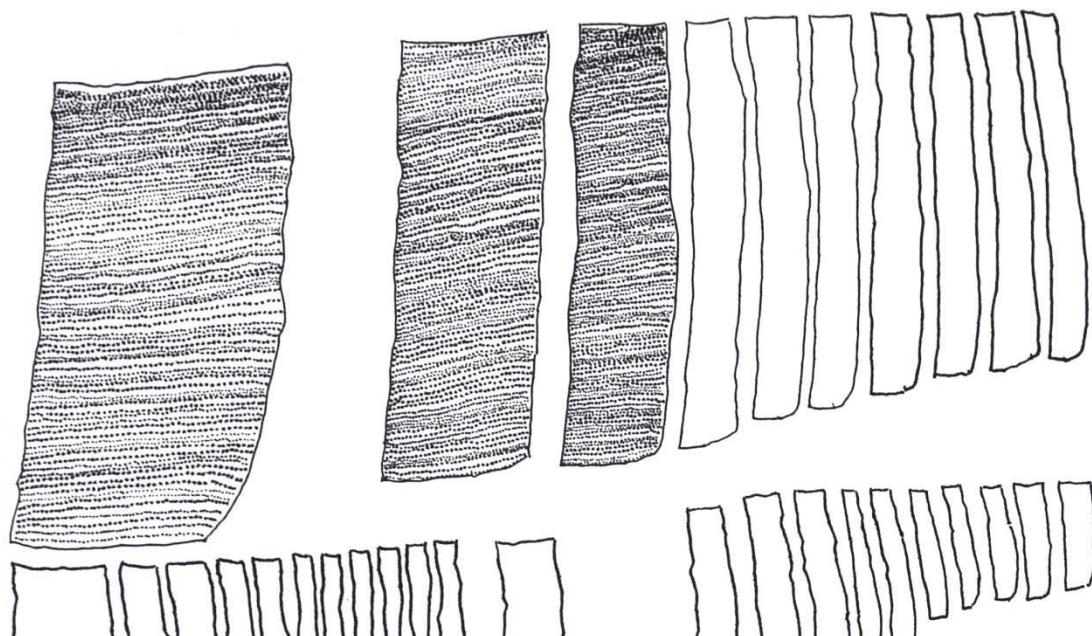
飛び跳ねながらずっと待っていてくれたのだね

先を急がず僕が来るのを待ってくれたのだね

僕の気持ちに気づいてくれていたのだね

男の子の笑顔 女の子の手の温もり

カサカサと人形を触る音 地面を蹴る音が響くだけ

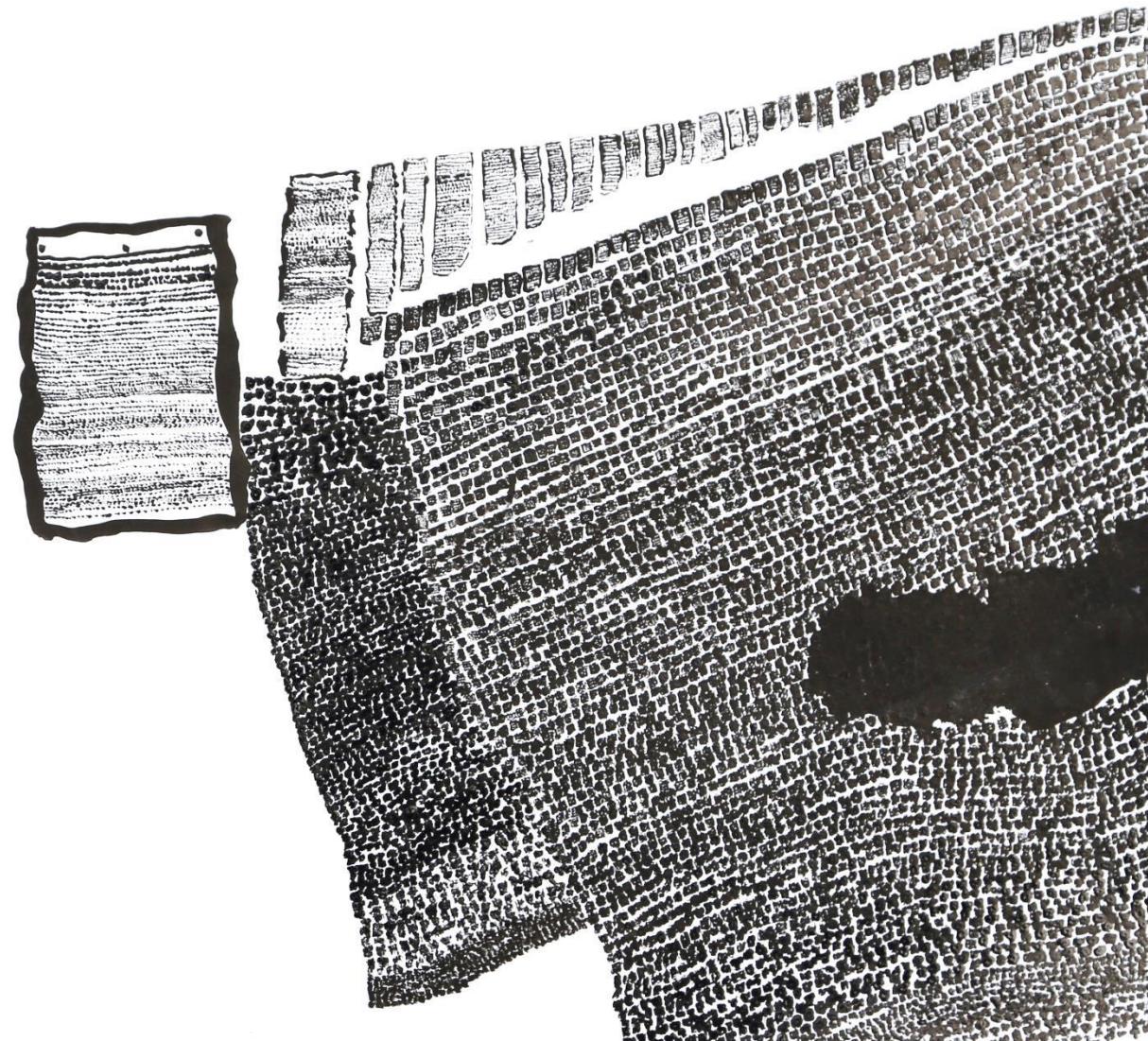


僕より歩くのが遅い男の子のおかげで
知らない景色を知る事が出来た

僕の声が聞こえない女の子のおかげで
人の心に耳を澄ますことが出来た

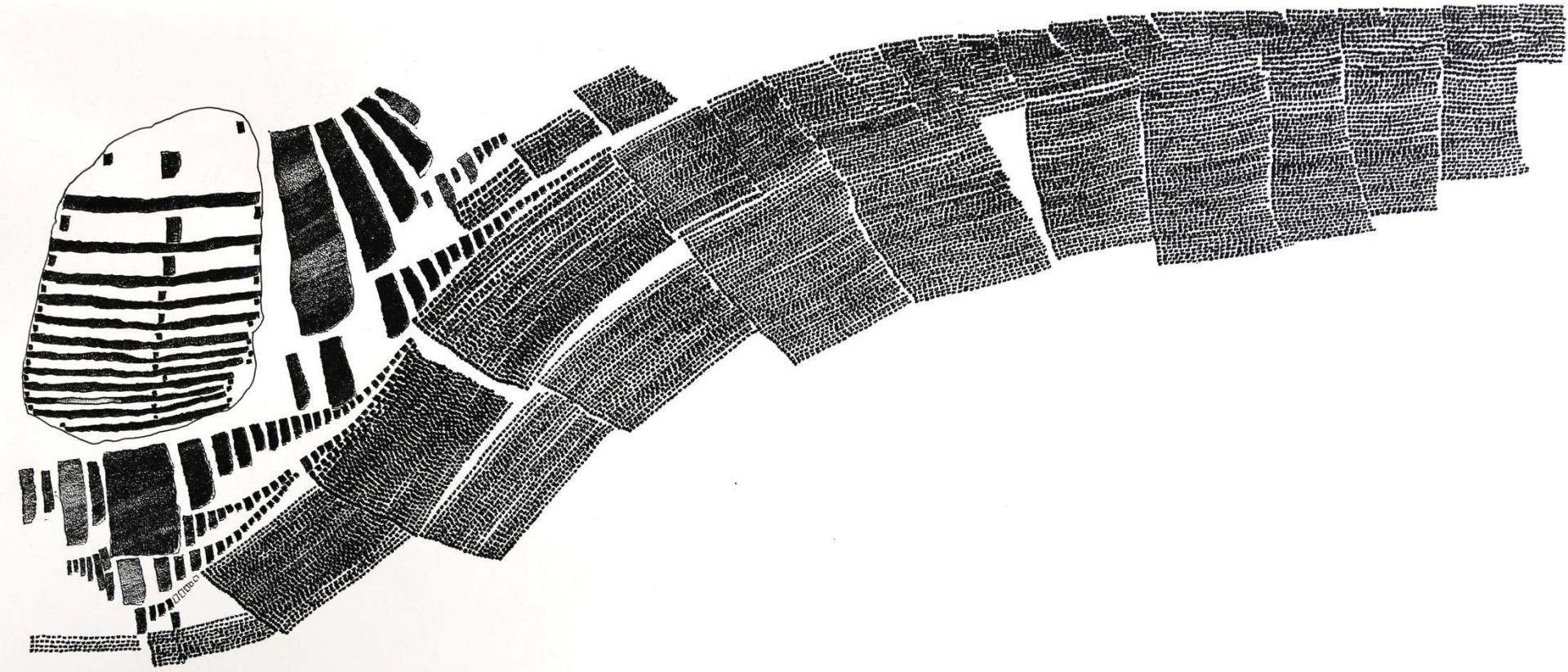
人形を手にした女の子のおかげで
いろんな考えがあることを知った

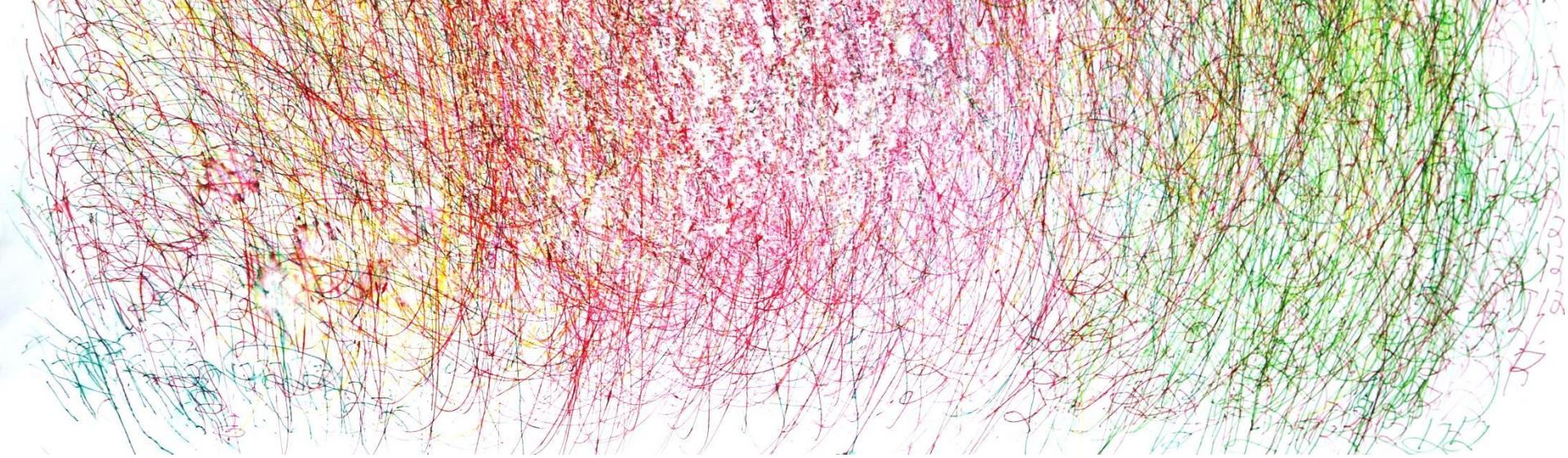
飛び跳ねる男の子のおかげで
自分らしく生きる自信がついた



4人のおかげで

恐れず
あきらめず
自分を愛し
人を愛することができた





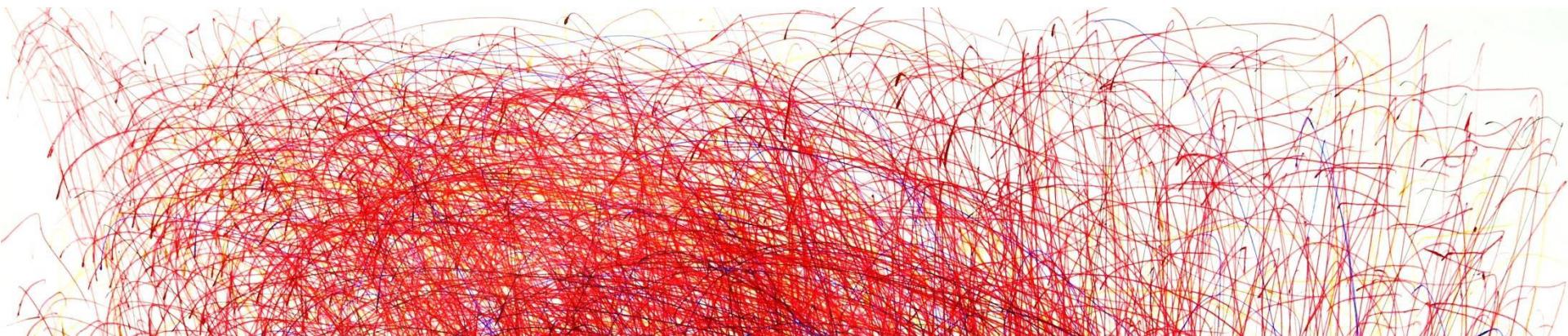
4人は大切な事を教えてくれた



ある日僕は山登りを始めた
辿り着いたのはその山のいただき

そこから見えた景色は はるかかなたまで続くやまなみ

男の子の笑顔 女の子の手の温もり
カサカサと人形を触る音 地面を蹴る音が響くだけ





僕はふたたび山登りを始めた

どうしてその山を登り始めたのかはわからない

理由なんてない、先のことなどわからない

高くそびえるその山にむかい ただ一步踏み出しただけ

みんなといたいから踏み出しただけ

歩いているとまた一人の男の子に会った
ワクワクした僕は 空に向かって微笑んだ



おしまい